

2022年12月4日 礼拝説教要旨
詩編講解説教129「過去からの自由」
詩編129：1～8、ローマ6：20～23

詩編第129編は冒頭1、2節で「わたしが若いときから彼らはわたしを苦しめ続けた」と繰り返されます。ここでの「わたし」はイスラエルを指します。また「彼ら」とは4、5節にある「主に逆らう者」「シオンを憎む者」であり、イスラエルに敵対していた国々と理解することができます。あるドイツの聖書学者は「イスラエルの歴史は一つの受難物語である」と述べています。イスラエルはエジプトでの奴隷生活、またアッシリア、バビロニアによる占領、捕囚の時代、ローマ帝国による支配等々、様々な苦難の歴史が繰り返されてまいりました。またドイツによるホロコーストもその苦難の歴史の一つと捉えることもできるでしょう。1、2節の繰り返しは、そのような苦しみは歴史の中で何度も繰り返されたことを示しています。

詩人は過去を振り返りながら、自分たちの受けた苦しみを思い起こしています。そしてこの苦しみが実にリアルに表現されているのが3節の「耕す者はわたしの背を耕し、畝を長く作った」という部分です。ミカ書には「シオンは耕されて畑となる」（3：12）とあります。敵による土地の強奪、それによる人々への弾圧が背景にあることが考えられます。さらに興味深いのは、「背を耕し、畝を長く作った」の部分ですが、聖書協会共同訳では「悪しき者らはわたしの背に鋤を当て、長い畝を作った」と訳します。「背に鋤を当てる」というのは想像しただけでも恐ろしい感じがしますが、これは実際に体に傷を負うことと理解することもできるのです。畑の畝のように背中に何本もの痛々しい傷が残っている。以前、『パッション』というキリストの受難を描いた映画ありましたが、主イエスが十字架にかけられる前に兵士によって鞭打たれるシーンがあります。この鞭打ちで命を落とす人がいたとも伝えられています。イザヤ書には次のような言葉があります。「頭から足の裏まで、満足なところはない。打ち傷、鞭のあと、生傷はぬぐわれず、包まれず、油で和らげてもらえない」（1：6）人々の受けた傷がいかに深いものであるかを想像することができます。

そしてその傷は、単に体の傷だけではなく、心の傷としても残るのです。よく「トラウマ」と言いますが、これはギリシャ語で「傷」という意味の言葉です。日本語では「心的外傷」と言います。イスラエルの人々も過去の辛い経験によって心に傷を負っておりました。体の傷はやがて癒えるかもしれませんが、でもその傷跡を見るたびに痛みがよみがえってくる。古傷が痛むと言います。心の傷が疼くのです。この詩編が巡礼の歌であることを考えますと、人々は心の傷の痛みを感じながらエルサレムを巡礼したのではないのでしょうか。

それはわたしたちも同じです。わたしたちも何かしら過去の辛い経験があって、それが心の傷となって残っていることがあります。その傷を抱えながらわたしたちは礼拝に集うのです。最近、幼児虐待のニュースが続きます。親の虐待だけではない。保育士や教師による虐待やいじめ、不適切な指導、そういうニュースが後を絶ちません。一番心配なことは、子どもの心に与える影響です。心は非常に繊細ですから、一度受けた心の傷は簡単に癒えるものではありません。わたしも保育園で職員の方々と聖書の学びをしますが、一番伝えたいことは、どうしたら子どもも大人も高い人間性、倫理性を持って、他者を労わり、相手を尊重して生きることができるか、そういう人格形成、人間形成のことです。そして人格の形成に関わる事柄というのは、信仰抜きに教えることはほとんど不可能です。真に人格を形成していくことができるのは、人

間をお造りになられた神さまの言葉しかないからです。主イエスは教えられました。「人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉によって生きる」また使徒言行録には「この言葉は、あなたがたを造り上げ、聖なる者とされたすべての人々と共に恵みを受け継がせることができる」（20：32）エフェソの信徒への手紙には「聞く人に恵みが与えられるように、その人を造り上げるのに役立つ言葉を必要に応じて語りなさい」（4：29）聖書は繰り返し神さまの言葉によって人が形成されていくことを語ります。だからこそキリスト教保育、信仰教育は重要なのです。

人が神さまの言葉によって造り上げられるなら、その心の傷も神さまの言葉によって癒されていくに違いありません。なぜ巡礼者たちが毎年エルサレムに旅をするのか。それは何よりも心の傷を癒すためです。過去の辛い経験、そこで負った心の傷を癒すことができるのは神さまの言葉だからです。そこでこそ人は自分自身を取り戻し、もう一度立ち上がることができる。そのために彼らは傷を抱えながらもエルサレムを目指します。「主は正しい。主に逆らう者の束縛を断ち切ってください」（4節）この「束縛」というのは綱、縄のことです。過去の辛い経験がトラウマとなって、そこに縛られ、がんじがらめになっている。それがわたしたちの現実です。けれどもその綱を神さまは断ち切ってください。その傷を癒し、そこから自由にしてください。そういう神さまの救いが御言葉によって与えられています。

そしてその救いがいよいよはっきりとわたしたちに示されたのがイエス・キリストの救いです。この罪の縄、束縛からわたしたちを解き放つために神さまはその独り子を世にお遣わしになりました。御子イエス・キリストは十字架で死なれ、わたしたちの罪を贖い、よみがえりの命によって、わたしたちを罪の奴隷の状態から解放し、神さまの御前に生きる、自由な人間として回復させてくださいました。そのために尊い独り子の命がささげられました。わたしたちの心の傷は、御子の十字架の傷によって癒されました。イザヤ書に「彼の受けた傷によって、わたしたちは癒された」（53：5）とあります。このキリストの犠牲、罪の赦しによって、わたしたちの傷は癒され、回復され、罪の虜から自由になって、また新しく歩み出すことができます。その御言葉を聴くためにわたしたちは毎週礼拝に集まり、神さまの言葉を聴くのです。わたしたちも過去に捕らわれ、思い出す度に心の傷が痛むことがあるでしょう。でもその傷を癒し、痛みから立ち上がらせてくださるためにイエス・キリストは果敢に罪に立ち向かい、これに勝利してくださいました。このキリストによってわたしたちは過去から解き放たれ、再び前に向かって歩み出すことができます。